

保育の現場から

一学期始まりの風景から

高橋陽子



夏休みの終わりに

九月、いよいよ二学期が始まります。長い休みを体験し、久しぶりに登園してくる子どもたち一人ひとりが、生活を豊かにし、より成長していくことを願い、始業式を迎えます。

四月に進級、入園した四歳児。一学期を通して、幼稚園での生活に慣れ、クラスの一員として少しずつ自分らしさを出せるようになってきました。なじみの場

所ができたり、遊具や材料の扱いにも慣れてきたり、一緒に遊びたい友達ができたりしました。

消防士ごっこや、ネコごっこ、忍者ごっこなどのごっこ遊びや、お山でのダンゴムシ捕り、砂場や固定遊具で友達と一緒に遊んで、楽しそうに遊ぶ子どもたちが多くいました。その反面、一人黙々と製作し続けたり、教師のそばで一日の大半を過ごしたり、遊んでいる途中で友達となんだかうまくいかなくなったり困ったりする子どももいました。

いろいろなことを経験しながら、七月半ば過ぎ、長い夏休みに入りました。幼稚園に通う生活から、家庭で、家族と一緒に過ごす生活に戻りました。

一か月強の夏休みを過ごし、子どもたちはどのような表情で始業式の日に登園してくるのでしょうか。一学期の子どもたちの様子を思い出したり、長い休み明けということを考えていたりしながら、環境を整えるなど、二学期の準備を進めるのは、夏休みの終わりのころです。

いろいろな子どもたちが入れ替わりながら、遊びが広がっていたままとコーナーは、落ち着いて過ごせる空間として、あまり環境を変えませんでした。しかし、固定的なメンバー四、五人で、来る日も来る日も遊んでいた（一学期の半ば以降は、一日の後半は戸外に出るなど、違う遊びに取り組んだり、違うメンバーで遊んだりすることもありましたが）木製汽車の遊具（木製のレールを組み合わせ、磁石で連結した汽車を

走らせる）は、長い休みをきっかけにしまうことになりました。違う場所に向くことでいろいろな遊びを体験したり、いろいろな人と出会ったりすることを期待してのことでした。セロハンテープや紙などを置く材料棚のものや配置は、変えませんでした。使い慣れたものを利用することで、じつくりと深く作ったり、ごっこ遊びなどで必要だと思ったものを、思った時にサツと作ったりしてほしいという願いからでした。

砂場は、遊ぶ様子を見やすくに出せるように、一学期には使っていなかった長いスコップを準備しておきました。園庭をあがった「お山」と呼ばれる場所の、伸びすぎた雑草は、大部分は自然のままに残しながらも、蚊対策もかねて周囲は短めに刈りました。雑草の中では、バッタが跳ねていました。「二学期が始まっても、バッタはまだいるかしら」「子どもたちはバッタ捕りに夢中になるかしら」などと想像しながら、作業を進めました。

始業式を迎えて

「虫を探し、違いに気づく」

子どもたちは、背だけではなく、表情も少しお姉さん、お兄さんになって登園してきました。「始業式が始まるまで、遊んでいていいの？」と聞いてきました。「声をかけたら、すぐに戻ってきてね」というと「は〜い」と元気よく返事をして、大好きな園庭に駆け出していきました。保育室に残って友達や教師に話しかけてくる子どもや、緊張した面持ちで朝のしたくをし、椅子に座れてホッと落ち着く様子を見せる子どももいます。

園庭に飛び出していった子どもの多くが「お山」に直行します。時間になり、お山に行った子どもたちを迎えに行くと、「先生、変なんだよ。ダンゴムシがないんだよ」と言う子どもがいました。一学期には、落ち葉や植木鉢をよけると、必ずたくさんのダンゴム

シを見つけることができる場所でした。ここに来れば必ずダンゴムシに会えるということで、その日も確かめに来たのでしよう。その時は教師も一緒になって落ち葉をよけ、目をこらしてやつと見つけることができ、保育室に戻ることができました。

始業式後もお山に行き、落ち葉をよけたり、植木鉢の下をのぞき込んだりして探していました。五歳児の「バッタがいた」の聲が雑草の茂っている所から聞こえてきました。子どもたちはスツと立ち上がり、その声の主の年長児たちの姿を確認し、そちらに近づいていきました。

五歳児は、得意そうに虫かごに入れたバッタやカマキリ、コオロギなどを見せられました。四歳児は、ダンゴムシ探しからバッタ、カマキリ見つけに、気が動いていったようでした。その日以降も四歳児たちは雑草をかきわけ、目を凝らして探しますが、なかなか見つかりません。そのうち、お山だけではなく、

園庭の中央にある畑（この年は、一学期に花壇を畑にし、キュウリやナスなどを植えていたところでした）で捕れることが伝わってきて、比較的多くいるコオロギなら捕まえられることもありました。

しかし、一学期に見つけていたダンゴムシのようにはたくさんは見つかりませんでした。それでも追い続ける子どももいましたが、一緒に捕っているメンバーで、鬼ごっこや砂場などで遊ぶようになっていきました。

季節の変化と共に、見つかる虫も変わります。虫によって、住む場所や捕まえることのできる個体数も変わります。子どもたちは、自然の中で虫に出会うことを通して、それらのことを感じていることでしょう。虫との出会いは、自分たちにも、友達といろいろ違う姿や考え方があることに気づき、みんな違うことは当たり前前のこととして受け止めていくようになる、大事な体験の一つではないかと、考えています。

「遊びが変わり、かかわりが広がる」

さて、一学期に登園すると木製汽車で遊んでいた数人の男児たちはどうしたでしょうか。かれらは「何でないの？」と毎日聞いてきました。私は「もう、たくさん遊んだからねえ……」と、なんとも説得力のない言葉を返していました。自分の誕生日がきたら、戻ってくるかもしれない淡い期待をしていた子どもがいることを、保護者から聞きました。

それほど木製汽車には、魅力があるようです。だからといって、四歳児クラスですつと出したままにしておいても、あまり遊び自体が変化するようには思えませんでした。レールのつなぎ方や、駅を作る場所などを工夫していたり、電車の特徴をとらえて「これは○線」と言ったり、車掌になりきって駅名をすらすら言ったりする姿は、本当に見事でした。しかし、それ以外の、たとえば、友達同士で工夫を重ねたり、思い

通りにしたくて主張し合ったり、という経験は、木製
汽車遊び以外であつても、重ねることができること。
違う遊びをすることで、いろいろな友達とかかわつた
り、体をたくさん動かしたり、違うものと触れたりし
て、遊びの幅や友達関係が広がることを期待していま
した。

木製汽車をしまつてから、自分たちで箱などを利用
して電車を作り、椅子や紙を使って線路や駅を作つて
遊ぶ姿が見られました。また、園庭に出て行く子ども
もいました。

砂場で砂を掘つたり、水を流したりして遊ぶ子ども
もいました。砂場はいろいろな子どもたちが入つてき
ます。掘る場所や水を入れるタイミングなど、やり方
が合わず、砂をかけあつたり、友達が掘っている穴に
わざと砂を入れたりすることもありました。「水を運
んでこい」と言われて断れずに水を運び、流すのはほ
かの子ども、という姿があつたりしました。

さまざまな友達とのかかわりの中で、日が照つてい
る時はためた水がどんどん温かくなることや、水が砂
に浸透していく様や、何度も水を流すと透明のきれい
な水の流れになることなど、砂と水と傾斜など、自然
の不思議さや発見の喜びを感じ合う体験をたくさん重
ねていったように思います。

「少しずつ変わるうとする」

園庭の自然の移ろいや、保育室の環境の変化から、
遊びや人やものとのかかわりが広がつたり深まつたり
したできごとを取り上げました。もちろん、かかわり
の変化は、一つの事に起因するわけではありません。
いくつものことが折り重なり、絡み合つて子どもの成
長を支えています。

A子は、三年保育四歳児。入園してから一年一学期
以上、保育室に入る時に「おはようございます」がな
かなか言えない子どもでした。たいてい保護者の後ろ

にびったりともたれかかるようにくつつき、顔だけ出して教師のあいさつを聞いていました。二学期になり少ししてから、A子が保育室の入り口扉で保護者の横に立ち、こちらを見て、教師があいさつすると会釈するようにになりました。思わず保護者に「今、A子ちゃん、あいさつしましたねえ」と声をかけました。保護者も、うれしそうな表情でした。

そのころから、A子はもともと一緒にいることが多かったB子と、もう一人加わって三人で、園庭のジャングルジムに出かけ、アニメのヒロインごっこをするようになりました。ジャングルジムにござをかけ、その中で三人で笑い合ったり、下で会話しながらごちそうを作ったりしていました。楽しそうな雰囲気、「入れて」とやってくる子どもたちがたくさんいました。メンバーが入れ替わったり、場所を移動しお山にある築山の頂上にござを敷いたりしたこともありました。頂上では、何人もの子どもたちと一緒に「ヤッ

ホー」と力強く叫んだり、何度も上り下りを楽しんだりするほど、体もすっかりとってきていました。A子の体の動きや、友達とのかかわりの変化と共に、朝、自分から「おはようございます」と、声に出して言うようになっていきました。

二学期になり、自分で保護者の背中から出てきたA子。そして、親しい友達以外を受け入れたり、大きな声を出したりするようにもなりました。A子の変容を通して、子どもは自ら成長しようとする力があることを今まで以上に感じさせられました。

九月、二学期の始まりは、子どもたちも少しずつ変わろうとしている時期であり、教師側も環境をどのように整えて子どもたちを迎えるかを深く考え、今まで以上に子どもの変化をしっかりと受け止めようと、気持ちを持ちを新たにする時なのかもしれません。

(お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)